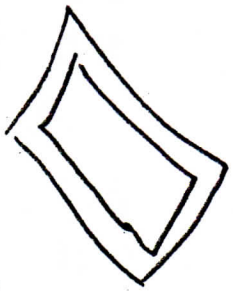
喜歌劇 スペードの女王

<あらすじ>

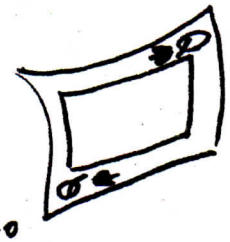
工兵士官であるゲルマンは、騎兵士官トムスキイの家で連夜開かれるカルタ勝負を熱心に見守りはするが、決して自分では金を賭けようとはしない。しかしトムスキイに言わせれば、ゲルマンよりも自分の祖母アンナ・フェドトブナ伯爵夫人が賭けをしないことのほうが奇妙なのだという。なんでも伯爵夫人はかつてカルタで散々に負けたのだが、ある人から必勝の手を教わり、失ったはずの大金を取り戻したことがあるのだ。さらに同じように大負けした青年を哀れに思い、その策を授けて勝たせてやったというのである。それを聞いたゲルマンは心躍らせたが、同時に自分にとっての必勝の手は節度なのだと思い直す。

しかし思案にふけりながら歩き、ふと顔を上げた先は伯爵夫人の屋敷だった。ゲルマンは覚悟を決める。伯爵夫人にいいように使われるみじめな娘

リザヴェータをかどわかし、逢いびきの風を装って館に忍び込み、伯爵夫人の寝室に滑り落ちた。ゲルマンは勝つための手を自分にも教えろと迫るが、しかし伯爵夫人は「あれは笑談だった」と言ったきり無言のままであった。ついにゲルマンは懐から拳銃をとりだして突きつける、と伯爵夫人はそのまま恐怖に戦きことゆれた。リザヴェータの手引で館を脱出し、その後の伯爵夫人の葬式にも顔を出したゲルマンはある夜にたまさか目を覚ました。誰かが訪ねてきたと気をやる彼の枕元に、あの伯爵夫人が姿を現した。驚くゲルマンに、老女は「三トロイカ」「七セジョルカ」「一トウズ」の順でカルタを張れば勝てると告げたのであった。必勝の策を得たゲルマンは、カルタで大金持ちとなったチェカリンスキイのテーブルについた。「三」に有るだけの金を賭け、ゲルマンは見事に勝ちをおさめた。次の日は「七」に有るだけの金を賭けて、やはり鮮やかに勝った。三度目の勝負の日には噂を聞きつけてたくさんの観衆が集まっていた。



— チェカリンスキイは顫える手に札を配った。右手には『女王』が、左手には、『一』が出た。
「『一トウズ』がやった！」とゲルマンは言って、持ち札を起こした。
しかし、出した手は『一』ではなく、スペードの女王であった。引き違いをするはずはないのだが…。
そのとき、スペードの『女王』が眼を窄めて、北叟笑みを漏らしたと見えた。
…『あいつだ！』彼は眼を瞑えて絶叫した。



— 前掲書P60～61

ゲルマンは精神に変調を生たし、ほどなく精神病院へ入れられた。

参考：Wikipedia